

母親就労の乳児期育児環境への影響に関する研究

川 井 尚

要約： 生後8カ月から14カ月の乳児をもつ母親を対象にした調査研究の資料から、母親が働いていること自体は乳児期における母子双方の心身の健康状態、育児態度、母子、父子関係、そして夫婦関係と、乳児が心身共に順調に発達しうるための基本的な育児環境に対しては影響を与えないという知見を報告した。ただし、働いていない母親との間に有意差がみられたもののうち、考察しなければならないことは、ゆっくりとした気持ちで子どもと過ごし、共にいることの充実感をもつものがやや少ないことである。これが育児休暇制度的なものの影響か、仕事の内容か、今後検討を加えねばならない。

見出し： 母親就労、乳児期育児環境

研究方法： 研究資料は、昭和60年度厚生省母子相互作用研究班が実施した乳児と母親の日常的な関係に関する全国実態調査を用いた。調査対象は、8カ月から14カ月の乳児をもつ母親1430名である。分析は、このデータを就労（以下Eと略）N=213、非就労（以下NEと略）N=1217に分け、各調査項目毎に χ^2 検定を行った。

結果： 調査項目39中、10の項目に5%水準以上の有意差が認められた。ここでは、就労の有無によって影響を受けるものと受けけないものに分けて、結果を示し、考察を加えたい。

1) 就労の影響がある行動

ゆったりとした気分で子どもと過ごせない母親がE群に多いこと、(E 17.8%, NE 4.5%)は帰宅後の家事に忙殺される等、ゆとり

がないためであろう。しかし、一方では子どもに話しかけたり、歌を歌ってあげたりが、E群の方に多く(E 77.6%, NE 72%)、積極的に時間をつくり関わろうとしていることがわかる。そして、その時、子どもが大変喜ぶのもE群に多く(E 72.7%, NE 65.5%)、これには母親との再会の喜びの影響があるとも考えられ、アタッチメントを強化しているものと思われる。E群では、母親以外の人との関わりがあるので、人見知りややNE群より少ない(E 30.9%, NE 35.5%)のは、当然のことである。公園などで同年齢と接する機会はE群71.1%、NE群85.4%とE群の方が少ない。E群のうち15.5%が保育所にいており、ここで体験しているためかもしれない。この他に、有意差があるものは、子どもを預けて外出する

ことがE群の方に多く(E 20.7%, NE 2.5%)、働く母親は日常子どもと離れる体験から預けることが容易にできるのであろうか。SC T法による調査項目のうち、母子関係のこの子と私はでは、一緒に楽しい、幸せ、満足感をもっているものがE群9.3%, NE群20.2%であり、これは前述のゆったりと子どもと過ごすことの少なさと関連している。私と私の母親はへの反応で差があるものは、母と二人で子どもを育て成長を楽しみにしている、というもので(E 13%, NE 7.1%)、祖母の育児参加がE群に多いことを示している。ちなみに、E群で保育園に通っているものは15.5%、NE群0.6%である。

2) 就労の影響がみられない行動

a) 子どもの心身の健康に関する項目

諸習癖、摂食障害、睡眠障害、発熱、下痢、極端な人見知り等の徴症状、心の健康さを示す、いきいきとした表情、十分楽しく遊べること、乳児期前期の微笑、発声、泣き、吸うこと、そして後追い等のアタッチメント行動の総てに有意差は認められず、母親就労の影響はみられない。

b) 母親の心身の健康に関する項目

母親の居場所の有無、心身の状態ともに有意差は認められず、就労そのものが母親の健康を脅かすとは言えない。

c) 育児態度に関する項目

過度な子どもへの関心、過保護といった育児態度に有意差はみられない。

d) 妊娠期に関する項目

妊娠に気づいたとき、胎動への反応に有意差は認められない。

e) 母子関係に関する項目

まず、授乳時の反応や子どもの不安をなだめること等の母性的行動に有意差は認められず、子どもの微笑、発声、泣き、吸うこと、そして後追いのアタッチメント行動にも差はみられない。

f) 夫婦関係、父子関係にも有意差はみられない。

考察： 母親の就労形態、仕事の内容等の条件がコントロールされていないので、結論づけるには不十分であるが、今後の研究課題を提起する意味で次のことを指摘したい。即ち、母親就労は、子どもと母親の心身の健康さ、育児態度、母子関係(母性行動、アタッチメント行動)、父子関係、そして夫婦関係と、乳児が心身共に発達するための基本的な育児環境には影響を与えない。筆者らは、61年度の本研究班の報告において、勤労婦人の妊娠期の心理、社会的分析において、就労そのものは妊娠期の母子関係の発達にネガティブな効果を与えないとの知見を述べたが、乳児期においても同様であることをここでも指摘できる。本研究で得られた結果から、働く母親と子どもがもう少しゆったりとした気持ちで過ごし、一緒にいることの充足感をもつことができたらと考える。特に、乳児期の母子関係では共にいることによってその心的機能である安全感を獲得することから、ゆっくりできない母親について検討し、それが育児休暇等の制度的なものか、仕事の内容によるものか等、明らかにする必要があると考える。働く母親は、この接触時間の少なさを意識し、積極的に子どもと遊び、よい時をもとうとし、子どももそれに応えているようである。

今後、就労形態、仕事の内容、仕事への態度そしてきょうだい等をコントロールすると共に、幼児期における母親就労の影響について、研究をすすめたい。

文献

- ①川井尚、小林登、平山宗宏ほか、乳児期の母子関係と心の健康—全国調査から—、昭和60年度厚生省心身障害研究、母子相互作用の臨床応用に関する研究 研究報告書 322-334
- ②川井尚、勤労婦人の妊娠期における心理・社会的状況の分析、昭和61年度厚生省心身障害研究、母子保健システムの充実・改善に関する研究 研究報告書 348-352



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:生後8ヵ月から14ヵ月の乳児をもつ母親を対象にした調査研究の資料から、母親が働いていること自体は乳児期における母子双方の心身の健康状態、育児態度、母子・父子関係・そして夫婦関係と、乳児が心身共に順調に発達しうるための基本的な育児環境に対しては影響を与えないという知見を報告した。ただし、働いていない母親との間に有意差がみられたもののうち、考察しなければならないことは、ゆっくりとした気持ちで子どもと過ごし、共にいることの充実感をもつものがやや少ないことである。これが育児休暇制度的なものの影響か、仕事の内容か、今後検討を加えねばならない。